

## 占領期・東海地区で発行された雑誌に関する考察

——カストリ雑誌化する『テラス』を中心に——

### 牧 義 之

#### はじめに

昭和二〇年八月に日本が敗戦を迎えてから、雨後の筍のごとく多くの出版物が刊行された。明治以来、内務省を中心に行われてきた言論統制から、表向きには解放された占領下日本の出版業界に、一時的なブームが巻き起こる。この時期の出版物としてよく知られているのは、「カストリ雑誌」と呼ばれる多分に性的な内容を持つ雑誌である。また、東京以外の各地域においても、総合、経済、芸能雑誌などが多数創刊、復刊された。

近年、占領期の出版・言論に関する研究や調査が進み、G

HQ/SCAPによる検閲の実態が明らかになってきた。<sup>1</sup>また、北海道や青森県<sup>2</sup>、秋田県<sup>4</sup>、新潟県<sup>5</sup>、富山県<sup>6</sup>、広島県<sup>7</sup>、島根県<sup>8</sup>、香川県<sup>9</sup>など、道県単位での出版に関する研究や資料の整備も盛んに行われつつある。これらの地域のうち、特に東北地区と北海道は、敗戦直後の首都圏における印刷事情の悪さから、「地方へ疎開、分散操業」<sup>10</sup>が行われた場所でもあった。二十年の空襲で東京都をはじめ全国主要都市が次々と爆撃された時、印刷業は甚大な被害を蒙った。東京では共同印刷が全焼。東京、大阪、名古屋の被害はとくに甚だしく、全国の被災率は社数で四三%、生産能力の四七%に達した<sup>11</sup>。という言葉の通り、都市圏での生産不能を地方でどう補うかが、戦時中から敗戦直後にかけての出版をめぐる課題であっ

た。出版事情の回復には、地元新聞社などの復興活動のほか、戦災の軽微さや印刷用紙の確保が、必須要件であったのだ。

では、戦禍が烈しく用紙事情も良くはない、愛知県をはじめとした東海地区での出版活動はどうであったのか。概略的な捉え方にしかならないが、名古屋市の統計<sup>12)</sup>によれば、「印刷業及製本業」に含まれる従業員「五人以上」の工場数は、昭和一八年・三七三、一九年・六四、二〇年・一七、二一年・五四となっている。わずか四年の間だが、工場数の変動は烈しい。特に、二〇年一月、三月、五月、七月の断続的な空襲による罹災が大きかったようだ。しかし、地方都市における出版は壊滅だったのかというと、決してそうではなかった。石川巧が「手許にあるカストリ雑誌を見て、東京や大阪以外に静岡、愛知、岐阜、京都、兵庫など、大規模な製紙工場を抱える地域の近隣で刷られたものが多く、そこで蓄えられた資本と技術がのちの地方出版に活かされていることがわかる<sup>13)</sup>」と記したように、地方における出版・印刷の活動、回復が、占領期における出版界の下支えであった時期があり、地方出版の多彩さ、多様さは見過ごすことはできない。

本稿では、資料の少なさから甚だ不完全な考察に留まるが、

愛知県を中心とした東海地区における占領期の出版活動を、特に時期によって性格を変化させながら刊行を続けたテラス社の雑誌を軸として明らかにする。

### 一、占領期における東海地区発行の雑誌

特定の地域、地区内を主な流通範囲として発行された新聞、雑誌などの実態をつかむのは、資料面などでの限界や制約がある場合が多く、容易なことではない。特に、占領期においては「三号雑誌」などと称されるように、ごく短期間のうちに刊行が途絶えたタイトルが少なくない。敗戦直後の出版物は、地元の公共図書館であっても所蔵がない場合がほとんどで、逐次刊行物で全号の確認ができるケースはごく稀である。多くは、刊行時期の特定さえ困難である。そもそも、出版物自体が残っていないために、どのようなものが、いつ発行されていたのかが分からないので、ある地域における出版活動を考えるのには、常に実証的な困難さがつきまとう。

これまでに、戦後の雑誌出版については、全国的な流通を持つタイトルを中心に考察が行われてきた。主なものとして

福島鑄郎<sup>14</sup>や木本至<sup>15</sup>、田所太郎<sup>16</sup>による成果が挙げられる。また、占領期の地方雑誌に関する先行研究としては中司文男<sup>17</sup>、白土康代<sup>18</sup>、下田太郎<sup>19</sup>、谷暎子<sup>20</sup>、森岡卓司<sup>21</sup>らによって具体的な分析、考察が行われてきた。特に白土は、『大分春秋』『大分評論』などの検証から「地方における検閲が「甘かった」という指摘はあたらな<sup>22</sup>い」とし、福島が「当時、地方で発行になった無名の雑誌には、たとえ急進的論文であっても、GHQ当局は黙殺した。プレスコードに抵触しても知らぬ顔をした<sup>23</sup>」<sup>23</sup>という記述を実証によって批判している。中央と地方との検閲にどの程度の温度差があつたのかは、雑誌を一点ずつ、プランゲ文庫のゲラや検閲メモなどを参照しながら検証してゆくことで見えてくる問題である。では、地方都市・名古屋を中心とした東海地方では、占領期にどのような出版活動が行われていたのだろうか。

林眞<sup>24</sup>は、独自の収集による成果だと思われるが、愛知県内で占領期に発行された雑誌一七六のタイトルを挙げている。これらの中には、誌名変更したものや合併したもの、「未見」や計画だけで終わったものも数えられているため、実数としてはもう少し少なくなると思われる。しかし、ここから戦後

に発行された雑誌の傾向を概観することはできる。多くは文芸誌であるが、総合的な雑誌（『文化人』『三河レポート』など）やサークル誌（『オーロラ』『ユマニテ』など）もみられる。

より詳細な刊行リストとしては、近年の研究にも活用されているプランゲ文庫の所蔵雑誌を発行地別にしたものが有用である。愛知県図書館が整理した「プランゲ文庫雑誌コレクション」愛知県の部<sup>25</sup> リストには、三五一のタイトルが挙げられている。「出版地」を見ると、「豊橋」「豊川」「二宮」「犬山」「常滑」など、名古屋市以外の諸地域においても雑誌が発行されていたことが分かる。これらの断片的なリストから、マイクロフィルムの閲覧・調査や実物の探索を行うことで、占領期雑誌の研究を始めることができる。その他に、三重県では九六タイトルで、『あさあけ』（国家地方警察三重県本部警務部）、『新しい村』（三重県農村文化協会）などの団体機関誌の他、短歌雑誌をはじめとした文芸誌が多い。中でも、地元出身の作家・田村泰次郎らが寄稿した『故郷』（アサギ書房）は見るべきものが多い。岐阜県、静岡県では現在のところ、特に整理されたリストは見られないが、プランゲ文庫

のホームページに掲載された記事<sup>27)</sup>に、タイトルの一部を見ることができるとも、近隣では長野県で二七五タイトル<sup>28)</sup>が確認される。いずれの地域でも、最も多く見られるジャンルは、文芸誌である。

占領期雑誌を考察する際の問題点としては、特定のタイトルであっても、刊行途中で内容に変化がつけられることによるジャンル区別の難しさがある。前島志保は、雑誌ジャンル区別の難しさには、雑誌内部に「様々な要素の混在と変容<sup>30)</sup>」があることにその要因があり、「予め固定された雑誌ジャンルを想定するのではなく、それぞれの雑誌を構成する様々な要素、すなわち、紙質、サイズ、内容（話題）の傾向、執筆、編集手法（表紙、小見出し、記事ジャンル、文体、構成、レイアウト、挿絵・写真など）、読者層、読者と雑誌の関係性、発行形態・頻度、関わった出版人（編集者、発行人）、出版社の特徴、など複数の項目に目配りした考察が必要になる<sup>31)</sup>。とりわけ、これまであまり重視されてこなかった、編集手法に注意を払った考察が重要になってくる<sup>32)</sup>ことが予想される」と指摘している。前島は特に、性的な内容を持つ雑誌と婦人雑誌、夫婦和合雑誌との近接性を問題にしている。雑

誌『夫婦生活』に表れた内容の変化には、「当時最も売っていた雑誌ジャンルであった婦人雑誌の構成に徐々に近づけていくことで、さらに部数を増やしていきかった<sup>33)</sup>」という目論見があったことを指摘した上で、「雑誌出版界と雑誌ジャンル全般の大規模な再編が進行していたであろう占領期の雑誌文化<sup>34)</sup>」の中で、「雑誌出版界および雑誌ジャンル再構成の動態的把握<sup>34)</sup>」が行われるべきと論じている。前島はまた、いわゆる「カストリ雑誌」は「大衆娯楽雑誌出版全体の流れの中で考察する必要<sup>35)</sup>」もあるとしている。先に、敗戦後の出版物の代表として「カストリ雑誌」を挙げたが、この時期には、純粋なカストリ雑誌（ヌード写真や絵、性的な内容のみで読者の購買欲を刺激するもの）と、カストリ的な雑誌（内容の一部に性的な内容を含めるもの）が混在し、かつ表紙や体裁を一目見ただけでは判別がつきにくいものが多量にあった<sup>36)</sup>。雑誌ジャンルは固定されたものではなく、時期によって戦略的に変化をもたせながら刊行を続けたタイトルも多数存在した。本稿で扱うテラス社の雑誌もその一例であるが、本稿の考察は、前島の要求に呼応する記述を指摘するものである。

## 一、東海地区のカストリ雑誌

占領期に刊行された出版物で、早い時期に研究が行われたのがカストリ雑誌である。斉藤夜居<sup>37</sup>を嚆矢として、長谷川卓也<sup>38</sup>、山岡明<sup>39</sup>、山本明ら<sup>40</sup>、蒐集家による分析が積み重ねられてきた。しかし、コレクターであるが故の恣意的な、他者による再検証がなされにくい成果は、しばしば問題視されてきた。ここでは先行研究についていちいち触れることはしないが、それらの記述を参考にして、東海地区でのカストリ雑誌にはどのようなものがあつたのかを、ごく簡単に見てみたい。<sup>41</sup> 東京で刊行されたものほど流通範囲は広くないものの、地方雑誌の一形態として位置づけられるものである。

東海地区で刊行されたカストリ雑誌は、点数としてはごく僅かである。愛知県では、『オール軟派』（オール軟派社）、『テラス』（テラス社）、『ほんのう』（シノダ書店、一号のみ）、『ネオリベラル』（第一読物）（東亜社<sup>42</sup>）。岐阜県では『オール猟奇』（改題『オールナイト』、石神書店）、『猟奇ゼミナール』（小説と講談『艶麗』（双立社）が挙げられる程度である。

三重県や静岡県での発行は確認されていない。東海地区に限らず、どの地域でも東京発のタイトルの中に、地元発のタイトルがごく僅かに入る形で、カストリ雑誌が受容されていたようである。ただし、露店に並び叩き売られ、読み捨てられるカストリ雑誌の性格上、発行地がどこであるのかは、同時代の読者にとって、さほど気にされるものではなかったと想像される。あくまで、カストリ雑誌は商機とタイトルの充実に重きを置かれて、地方で生産されたのだと思われる。

特色があるのは、ともに東京と何らかのつながりを持つ石神書店と双立社である。複数のタイトルを持つ出版社があつたことにより、岐阜県ではカストリ雑誌の流通が大きな問題になっていたようである。

思想の混乱は出版界にも影響していわゆる際物の氾濫となり、エロ・グロ出版物の横行となつた、県下でも石神書店ヒツパラ書房等がこの時流に便乗し「阿部定色ざんげ」「オール猟奇」等一連の工口本を出版して、世の指弾を浴びるほど全国を風靡させた、遂に工口本は岐阜市の定評さえ得るようになった、こうして一時、本屋

の店頭は宛然春本展覧会の観を呈するに至つたがそれが青少年に及ぼす影響の甚大さについて取締当局、一般民間団体は工口出版追放運動を展開、用紙の不割当、体刑罰金の重罰主義をもつてぞくぞく摘発したため二十三年三月頃を頂点として全国的にはやや下火となつてきたが岐阜においては依然その売行き八〇%という状態である、しかし悪書追放は徐々に功を奏し新興出版社は多く自粛の気配をみせると同時に経済的には大きな危機に見舞われ、七月にいたつてようやく出版界に苦悩の兆が濃厚となつてきた<sup>44</sup>

これに続けて「県下の主なる出版社と代表書」が列挙され、その中に「石神書店（柳ヶ瀬）堤千代名作選集、お定色ぜんげ（単）ピツパラ書房（神田町）猟奇セミナル」と記されている。双立社が「ピツパラ書房」とされている理由はよく分からない。いずれにしても、この二社が岐阜県におけるカストリ雑誌出版の代表格であり、全国的なブームを牽引するほどの存在であったことは確かである。

カストリ雑誌と一言で言つても、先に触れたように、その

傾向には時期的な変化が見られる。石川はカストリ雑誌を「狭義」のものと「広義」のものに分け、「狭義」の流れを次のように整理している<sup>45</sup>。

・第一期（昭和二年一〇月～二年七月）…『猟奇』創刊、類似誌の出現。

・第二期（昭和二年八月～四年五月）…『オール猟奇』が女性の全裸表紙絵を使う。本格期。グラビア裸体写真が不可欠になる。

・終末期（昭和四年六月～五年五月）…『夫婦生活』創刊。B5版から小型本へ。本格的娯楽雑誌の台頭によるカストリ雑誌の衰退。

女性の肉体的性を前面に出した内容による雑誌を「狭義」のカストリ雑誌とする一方で、それらが行わなかつた誌面構成に関する編集作業や、著名な執筆者へ原稿依頼を行いつつ、「当初、編集部が定めていた理念や方針が読者の期待に応えるという名目で次第に変容し、結果として同時代を席捲していたカストリ雑誌へと近接する過程<sup>46</sup>」をもつものを「広義」

のカストリ雑誌としている。この「広義」のカストリ雑誌は、昭和二年一月に創刊された『りべらる』(太虚堂書房)以降、「狭義」の第一期、第二期を通じて約三年半の隆盛があった。「狭義」のカストリ雑誌が扱ったものが「性」であるのに対し、「広義」のそれは「文化」を扱い、その中に「性」が含まれていたことになる。

石川と先に触れた前島の論は、ブームに起因する雑誌の「動態的把握」を問題にした点で共通するものである。これまでにコレクターの恣意的な分析に陥りがちであった占領期雑誌について、俯瞰的な視点から眺めてみる試みである。では、地方で刊行された雑誌についても、ジャンルの変容や内容の近接といったものは見られるのだろうか。それを顕著に見せてくれる雑誌が、愛知県で発行されていた。次節からは、一出版社の活動にポイントを置いて、地方雑誌の「動態的把握」を試みる。

## 二、テラス社刊行雑誌の分類について

先に触れた林眞による愛知県発行雑誌のタイトルを眺める

と、一つの出版社が複数種の雑誌を発行している場合がある。その代表格が、地元の中部日本新聞社(現・中日新聞社。林によつて挙げられたタイトルは、『岳人』<sup>47</sup>、中日ウィークリー、『中日スポーツ』、『中日トピック』、『農業日本』、『婦人と子供』、『物語』)であるが、それに次ぐのが『テラス社』である。テラス社発行の雑誌として、『シルエット』、『テラス』、『読切小説集』、『龍虎』の四誌が挙げられている。地元の有力新聞社に次ぐタイトル数を持っていたテラス社とは、どのような出版社であつたのだろうか。部分的に残存している四誌を見てみると、占領期における地方出版社の巧みな編集作業が浮かび上がってくる。

残念ながら、テラス社という組織に関する資料は、今日までのところ確認されていない。同時代の出版社に関する資料を見ると、『昭和二年度版 最新出版社・執筆者一覧』<sup>48</sup>には記載がない。しかし、その後に行かれた『昭和三年度版 出版社・執筆者一覧』<sup>49</sup>と『昭和二、三年度版 日本出版年鑑』<sup>50</sup>には、社名と代表者「大海新一」の記載がある。出版の「部門」(雑誌のジャンル)については、前者は「女性雑誌」、後者は「演劇」として分類されている。「部門」の相

違は、後に触れる時期ごとの性格の変化に関係していると思われる。さらに、『一九五一年版 出版社・執筆者一覧』の「出版社一覧 昭和二六年三月現在」に、部門の記載はないものの、社名、住所、振替番号、電話番号の記載がある。<sup>1)</sup>同書の「付録1 雑誌名及同発行所総覧」の分類は、先の石川、前島の論考に活用されているものだが、テラス社の雑誌は「大衆」部門に「読切小説集」の誌名が挙がっている（七頁）。

また、当時の用紙割り当てに関する当局側の資料である『新聞出版用紙割当制度の概要とその業務実績 第三 出版編』の「資料」16、昭和二十六年四月期雑誌用紙割当明細表<sup>2)</sup>には、出版社名「テラス社」雑誌名「読切小説集」で記載がある。部数は四万部、「割当封度量」は一四、八五〇ポンドである。この数値は出版の規模を示すものであるが、試みに、『一九五一年版 出版社・執筆者一覧』の「大衆」部門に属する雑誌で、近い数値の出版社・雑誌を拾ってみると、以下のようになる。

・夫婦生活社 『夫婦生活』 三万部。 一一、七五〇ポンド。

・共栄社 『オール読切』 四万部。 一四、八五〇ポンド。

・六興出版社 『小説公園』 四万部。 一四、四〇〇ポンド。

・大虚堂書房 『りべらる』 四万五千部。 一六、七〇〇ポンド。

・桃園書房 『読切小説倶楽部』 五万部。 一八、〇〇〇ポンド。

出版規模としては、全国に流通した『夫婦生活』よりも大きく、『りべらる』とも大きな差はないことが分かる。同「資料」16、昭和二十六年四月期雑誌用紙割当明細表<sup>3)</sup>に挙げられた雑誌の中で、愛知県発行のものは全一二誌ある。

このうち、部数が万単位であるのは『読切小説集』の他に、『農業日本』（中部日本新聞社。四五、〇〇〇部）と『養鶏の日本』（養鶏の日本社。二〇、〇〇〇部）の二誌であり、割当ポンド数が万単位であるのはテラス社のみである（『農業日本』の割当ポンド数が発行部数の少ない『読切小説集』よりも低い値であるのは、総頁数の違いによるものである<sup>4)</sup>）。以上の数値が示すのは、地方雑誌でありながら、それなりの規模による出版をテラス社が行なっていたという実態である。いわゆるカストリ雑誌は、統制外のセンカ紙を用いるなど、当局の公式な洋紙割当を受けないで発行していたものが大半



であった。昭和二三年二月二〇日に新聞及出版用紙割当委員会出版部会は、低俗出版物を抑止するために不良出版物には割当を行わない旨の声明を出した。<sup>53</sup> 結果的にこの声明が、セリ力紙の利用を促進させたのであるが、出版物の内容が不良であれば、洋紙の割当を中止される場合があったのだ。昭和二六年四月の時点で、テラス社の『読切小説集』は割当を受けていたので、『低俗出版物』には当たらないはずである。

しかし、同時代の名古屋の読書風景を示す言説には、「太宰の死後、肉体文学の独走が始まっていた。いわゆるカストリ雑誌が町々に氾濫し、名古屋地区でも『読切小説集』その他十指に余り、この地区の作家たちが粗雑な文学とはほど遠い作品を書き続けていた」というものがある。公式には「低俗」ではないが、テラス社の『読切小説集』は名古屋の「カストリ雑誌」＝「低俗出版物」の代表と目されていたようである。そのように読まれた（テラス社の雑誌が「カストリ雑誌」と分類された）例は、城市郎コレクションを軸に構成される『別冊太陽 発禁本』の中で、「百花繚乱のカストリ雑誌」の一冊として『テラス』が紹介されていることにも見られる。<sup>54</sup>

当局の洋紙割当による公式分類では「低俗」とされずに、

読み手の分類では「カストリ雑誌」とされたテラス社の出版物とは、どのようなものだったのだろうか。ここからは、雑誌『テラス』およびその改題誌『読切小説集』を軸に、内容の変遷を詳細に追うことで、諸資料での分類に差異が生じた理由を考えてみたい。

#### 四、テラス社および初期『テラス』について

テラス社は、戦後間もなく現れた出版社であり、雑誌『テラス』を中心に複数のタイトルを刊行していた。発行所は名古屋市東区車道東町二ノ九で、昭和二二年九月から同市中村区大船町三ノ二〇へ移転（『テラス』一巻六・七合併号の告知による）、二三年四月には東京都世田谷区玉川中町二に「テラス東京編輯局」を開設している（三巻四号の告知による）。発行者は大海新一。大海については、現在のところどのような人物なのか不明である。おそらくは、名古屋市内で戦前から何らかの事業を行なった者ではないかと思われる。

『テラス』には、創刊号から「総合娯楽雑誌」というリードが表紙タイトルに添えられていたが、第三巻（昭和二三年）

以降は消えている。第四卷（昭和二十四年）からは「読切小説集」へ改題し、第六卷（昭和二十六年）半ばからB6版に縮小している。現在確認できる最新号は、第七卷第三号（昭和二十七年三月）である。国立国会図書館以外に所蔵がある機関は、北海道立文学館のみで、それ以外には確認されていない。<sup>96</sup> テラス社の特徴としては、株式会社であり、継続的な出版活動が確認され、さらに誌面の改良（総合系から読物系へ）を戦略的に行なっていたという点が挙げられる。占領期に始まった雑誌出版社としては、あまり類似例のない活発さを持つ組織であったと言える。

架蔵のものと国立国会図書館、及びプラング文庫所蔵分を交えて、『テラス』の刊行年月、特集タイトル、定価、及びテラス社発行の雑誌（印を付した）を時系列にまとめると、以下の通りである。

第一卷第一号（昭和二十一年一月）創刊号 一円二〇銭  
 第一卷第二号（昭和二十二年二月）「二月対談特輯号」一円五〇銭  
 第一卷第三号（昭和二十二年四月）「スター訪問特輯号」二円

第一卷第四号（昭和二十二年五月）「映画特輯号」二円五〇銭  
 第一卷第五号（昭和二十二年七月）「銷夏特輯号」三円五〇銭  
 第一卷第六・七合併号（昭和二十二年九月）「読物特輯号」三円

第一卷八号、九号（昭和二十二年一〇、一一月？）未見

第一卷第一〇号（昭和二十二年二月）「微苦笑読物号」四円

第二卷第一号（昭和二十二年一月）「新春 創刊一周年躍進号」七円五〇銭

第二卷第二・三合併号（昭和二十二年四月）「春風颯爽号」一

二円

第二卷第四・五合併号（昭和二十二年五月）「新装青葉号」一

六円

第二卷第六・七合併号（昭和二十二年八月）「青春歡喜号」一

六円

第二卷第八・九合併号（昭和二十二年九月）「モダン読物号」

一九円

第二卷第一〇号（昭和二十二年一〇月？）未見

『モダン獵奇雑誌 シルエット』創刊号（昭和二十二年一

月) 一八円

第二卷第一一・一二号(昭和二年二月)「特選お洒落読物号」二〇円

第三卷第一号(昭和三年一月?) 未見

第三卷第二号(昭和三年三月)「創刊二周年記念号」二七円

『獵奇犯罪読物 シルエット』第二号(昭和三年四月、肉體小説特集号) 未見<sup>57)</sup>

第三卷第三号(昭和三年五月)「恋愛名作特輯号」三〇円

第三卷第四号(昭和三年六月)「躍進増大号」三〇円

第三卷第五号(昭和三年七月)「爽快!青春読物号」三五円

『龍虎 大衆読切傑作集』(昭和三年八月) 四〇円

第三卷第六号(昭和三年一月)「内容刷新読物号」四〇円

『龍虎 大衆読切傑作集』第二輯(昭和三年二月) 四〇五円<sup>58)</sup>

『恋愛傑作 読切小説集』第四卷第一号(昭和二年一月)

六〇円<sup>59)</sup>

『特選 読切小説集』第四卷第二・三号(昭和二年五月)

『興味横溢傑作版』六〇円

『傑作 読切小説集』第四卷第四・五号(昭和二年七月)

『花形作家競艶号』六〇円

『恋愛傑作 読切小説集』第四卷第六・七号(昭和二年九月)

『評判作家書下し情艶読物集』六五円

『青春クラブ』創刊号(昭和二年一月) 六五円

『読切小説集』第四卷八・九号(昭和二年二月)「全篇新作書下し」六五円

『青春クラブ』創刊号(昭和二年一月) 六五円

『読切傑作読物集』二卷一号(昭和二年一月)「青春クラブ」改題) 定価不明<sup>60)</sup>

『改題) 定価不明<sup>60)</sup>

第五卷全号、未見

第六卷第一号(昭和二年一月)「新春特大号」八〇円

第六卷第二 四号、未見

第六卷第五号(昭和二年五月)「大家新鋭俊作号」八五円

第六卷第六号、未見

第六卷第七号（昭和二六年七月）「銷夏特別豪華読物号」八五円

第六卷第八号（昭和二六年八月）「愛慾・痛快・仁侠読物比べ」八五円

第六卷第九号（昭和二六年九月）「極め付面白読物満載」八〇円

第六卷第一〇号（昭和二六年一〇月）「錦秋情痴読物くらべ」八〇円

この間、未見

第七卷第三号（昭和二七年三月号）「春の増刊 娯楽の泉」都内八〇円、地方八三円

以降、未見

テラス社は、敗戦から五ヶ月後の昭和二年一月に『テラス』の誌名で雑誌を創刊し、少なくとも六年三月月以上は活動を行っていた。ここから、巻ごとの傾向を探ってみよう。

昭和二一年代の『テラス』第一巻は、都合一〇冊発行されたと思われるが、映画・演劇専門誌として創刊された。三号

までは表紙は二色刷り、花のイラストを中央に置いたシンプルなデザイン（図版1）であるが、四号からは表紙に映画スターや最新ファッションを着た女性のイラストが置かれる。

総頁数は三五から四〇。広告には名古屋市内の喫茶店、美容室、化粧品、楽器店、映画会社（東宝名古屋営業所）、商店などが並ぶ。記事としては、役者への楽屋訪問インタビュー、映画紹介、四頁程度の小説、一頁に満たないエッセイ、社交術を紹介したものなどで構成される。この時期の執筆者は、辻寛一、名和隆之介、立花秀人、市橋芳禰、酒々井昇、村山皓吉、鵜飼三之助（中部日本新聞文化部）らである。後半の時期には読物の特集も組まれるが、全体として小説が多いわけではなく、タイトルに冠した「総合娯楽雑誌」としての性格が強い。あくまで地域に根ざした「総合」雑誌を指したものと思われる。

「編集後記」には、編集者の意気



図版1 創刊号 表紙

込みと発行遅延に関する読者への断りがしばしば書かれている。

「二号雑誌？」とは巷間よく言はれる事であります。少くともテラスは皆様の御期待に逆かぬ様、斯うした情ないソシリを甘受せぬ様張り切つて発行を続けて参ります。本紙は利益主義を併して真に皆様本意の雑誌として格安に御愛読願ふつもりで居りましたが諸物価騰貴に抗しられず止む無く定価二円と致しました。皆様の御賢察と御同情を伏して御願ひ申上げます。(三号)

テラス第四号も種々の問題で発行が遅れました。真に申訳なく思つて居ります<sup>スミ</sup>会員、読者の皆様にお詫<sup>ウヤ</sup>ひ申します(四号)

印刷事情の悪さは、刊行の遅延に直結する問題である。翌年の第二巻では合併号が多発しているが、読者の関心を離さないようにしたい編集者の思惑が伝わってくる。敗戦直後のインフレーションは、定価の推移に如実に表れている。

プランゲ文庫蔵の一卷四号には、検閲の痕跡が認められる。一六・一七頁の山添信「舞踊場異変(一)」と二〇・二二・二六頁掲載の大辻司郎「当世感慨無量譚」に傍線と囲み線が付けられている(図版2)。前者の記事は、進駐軍兵が舞踊場の切符を買う記述がチエックされ、後者は進駐軍兵と「イエース」しか言えない少女たちの交遊をレポートしたものである。特に後者が問題視されたようで、検閲官「Hirayama」による翻訳文と、タイプされた決裁文が添付されている。この記事が占領政策への違反(violation)とされたようだ。

一卷五号も同様に違反とされたことがプランゲ文庫蔵本の



図版2 1巻4号 P.20-21 (部分)

表紙の書き込みから分かるが、本文中には「エックがないため、どの記事が問題になったのかは今ひとつ判然と



図版3 1巻5号 巻頭グラビア

しない。同号には、「テラス・なやましヴァラエティ」と題して、映画俳優らの写真を使ったグラビアが掲載されている(図版3)。ファッションに関する記事やイラストを多用する事で、「おしやれ雑誌」(一巻五号「編集後記」としての側面を打ち出そうとしていたようだ。「テラス・モード・シヨウ 夏のア・ラ・モード」(五号)、「ノーストッキングの脚線美」(六号)、「おしやれ女性専科 コートを生かすマフラーの使ひ方」(一〇号)などは、明らかに女性読者の獲得を意図した編集方針による記事である。

また、実態は不明であるが、「テラス・宝塚会」会員の募集が創刊間もなく告知され(二号、図版4)、会報や観劇会などの特典があったようである。東宝映画の広告が多く出され

ることから考えると、「テラス」創刊には名古屋宝塚劇場との何らかの関係があったように思われる。



図版4 1巻2号 P.15 (部分)

昭和二三年代の「テラス」第二巻は、合併号を多発しながら都合七冊が発行されたと思われる。表紙に洋服女性や手袋日傘などの小物のイラストを配したこの時期は、女性ファッション誌としての側面を打ち出した編集が見られる。

広告には市内の喫茶店、美容室、化粧品、学校(裁縫、ダンス)、楽器店、映画会社、商店、製造業(名古屋工業株式会社製版部、愛知トマト製造(現在のカゴメ)など)が並び、記事としては、映画女優のグラビア(図版5)、役者への楽屋訪問インタビュー、映画俳優、映画に関するコシッブ紹介、「新女性生活講座」「おしやれ女性専科」などの女性向け記事、四頁程度の小説、一頁未満のエッセイやコント記事、社交・恋愛術などが見られる。執筆者には立花秀人、市橋芳禰、稲

垣郁夫、酒々井昇、村山皓吉、西川鯉三郎らが常連であった。

また、一号から美人画の志村立美が表紙画（図版6）を書き、以降翌年の第三巻まで続いている。

合併号の多発については、前年と同様に「編集後記」で読者への謝罪が行われている。



図版5 2巻6-7号 グラビア



図版6 2巻6-7号 表紙

兎に角発行が遅れてしまつて大変申し訳ないと思つております。だと言つて決して私達の怠慢ではありません、

要するに制度と時勢が悪いのです。私達は新春号を発行してから物凄い張り切り方で奮闘したのですが、いろいろ隘路と言ふ道があらわれて迷つてしまつたのです。どうぞあしからず…（二・三号）

どうしたつて今時分約束を守る、なんてことは出来るものではない。そつでしよう皆さんもいる直接間接に体験なさつてゐらつしやることと思ひます。／このテラスも合併号の連続で真にどうも具合の悪いテイタラクではあります。が少くとも先号に於てタンカを切つただけのものは認めて頂けるものと信じて、いさゝか腹の虫をおさめてゐる次第です。／ローカルなものはどうしたつてローカルである。と言ふ面妖な定義はこれからの業界には通用しない世迷言にしなければならぬ。そりや成る程印刷技術なんか地の利を得た手合なんかからすれば少くとも片腹痛いわ、てな事になるかもしれないが、然しあの豪華な向日葵の花と南瓜の花とをよく吟味していただきたいものと思ひます。おのづから答ははつきりと現れてくると信じます。（八・九号）

「テラス社の活動のなかで、この年が最も出版の環境が不安定な時期であったようだ。



図版7 2巻1号 P.34



図版8 2巻1号 P.35

記事の中で特徴的なものは、広告を出している美容室の関係者が執筆したと思われる、化粧法についてのエッセイである。ニーナ・クボタ(マロミ美容室)は「原節子型のお化粧法」の「髪型」(一号、図版7・8)、「愛らしい口元と眼」(四・五号)、松浦よしの(松坂屋美容室)は「紅の用ひ方」(二号)、「頬とのバランスを」(六・七号)など、化粧法を紹介する実践的な記事を書いている。これらは、広告とのタイアップ記事と言えるものだろう。総頁数は三九から四七になったが、化粧法、ファッション情報には、一巻以上に多く誌面が割かれている。

女性に向けられた記事が充実した背景には、女性記者の存在があったようだ。『東海春秋』(昭和二年一月)の鼎談記事「婦人記者は語る」(二二―一五頁)には、「テラス社森下マサキ」という記者が参加している。<sup>(6)</sup>

前年の「テラス・宝塚会」と同様に、実際の活動については記事などがないため明らかではないが、「テラス芸能部」という、慰安興行の代理店のような事業を展開していたようだ(図版9)。

小説作品としては、北條誠の「連載小説 未亡人」が一一・







図版 11 『シルエット』 見返し

たつての試験的な出版のように思われる。『テラス』には『シルエット』刊行に関する記事は見られないが、『シルエット』の見返しには『テラス』の自社広告が大きく掲載されている(図版11)。「ここではまだ「おしゃれ雑誌」としての性格が大きく打ち出されていた。

### 五、改題と読物雑誌への路線変更

昭和二三年代の『テラス』第三巻は、読物を中心とした雑

誌へ変化しつつ、都合六冊が発行されたと思われる。総頁数は四三で統一されている。この頃から表紙の「総合娯楽雑誌」というリードが消え、志村立美による女性の華やか且つ艶かしい表情を大きく描いたイラストが登場する(図版12、13)。その表情が対象にしているのは、明らかに男性読者である。広告には、市内の喫茶店、美容室、化粧品、銀行、楽器店、映画会社、商店などが並び、記事には女優グラビア、四頁以上の小説、役者への楽屋訪問インタビュー、映画俳優・コシツブ紹介、一頁未満のコント記事などがあ



図版 12 3巻4号 表紙



図版 13 3巻6号 表紙

るのはそれまでと大きく変わらない。しかし、例えば四号を見ると、ルミ・牧村「流行の髪に似合ふ夏のスタイル 髪型と衿元の調和がスマートになるコツ」(三八・三九頁)のような女性向けの記事がある一方で、原奎一郎「女性は同時に二人の男を愛することが出来るか!」(二〇・二二頁)、杉田直樹「性生活の摂理」(二四・二五頁)、堀要「ももいるものがたり「桃色」というと何故エロチックに感ずるか」(二六・二七頁)、牧野肇「電車の中でいたずらをされたら 48年の場合」(二七・二八頁)、村山皓吉「女の子を喜ばすには(2)」(三九頁)といった、性的な要素を多分に含む男性向けの記事が掲載されている。また、女性との社交術に関する記事も多く見受けられ、前年までの女性向けファッション雑誌としての側面は大きく後退している。この時期の執筆者は、北條誠、杉田直樹、立花秀人、市橋芳禰、正木操、ルミ・牧村、村山皓吉、浜本浩らである。

四号には、東京編輯局の開設が告知されている。

弊社は編輯業務の拡充強化を図り、より充実した内容と記事刷新を以て読者の皆様の御声援に酬ひたいものと今

般東京に編輯局を開設致し、今月より活動を開始致しました。/何卒刮目して今後の飛躍を御期待下さい。/株式会社テラス社/東京編輯局/東京都世田ヶ谷区玉川中町二ノ三六三(三二頁)

地方雑誌を脱して、全国規模の流通へ拡大路線がとられるようになったのだ。そのためには、内容の大衆化(男性向け記事の充実化)が必須条件であったのだろう。ただし、印刷は変わらず愛知県で行われているので、編集機能のみを東京へ置くようになったようだ。

東京編集局の開設に先立ち、前年の昭和二年七月に「テラス」の誌名を商標登録に出願している(図版14)。これが認められたのは二四年四月で、後述するようにその時期には誌名が「読切小説集」に変えられているが、同名雑誌の刊行を未然に防ごうとするテラス社の経営戦略の一面が見られるものである。

この時期には、「テラス」の他に、『シルエット』(第一号)、『龍虎』という別タイトルの雑誌が二冊発行された。特に『龍虎』は、「大衆読切傑作集」という副題が表紙に添えられ

ており、時代小説  
 軽文学を軸に構成  
 された読物雑誌で  
 『テラス』以上に  
 大衆的な内容になっ  
 ている。『シルエッ  
 ト』『龍虎』と  
 もに、三号以降が発  
 行されたかどうか  
 は不明である。

昭和二四年代の  
 第四巻以降は、誌  
 名が『読切小説集』  
 へ変更され、男性

読物誌としての性格を決定的にしている。第四巻は総頁数が五九から七五と、創刊時の倍の量になってはいるものの、発行は都合五冊と最も少ない。この時期には、「編集後記」がないので、改題の意図するところは不明であるが、読物雑誌として当時流行していた「読切」の単語を冠した誌名にする



図版 14 『工業所有権公報』(昭和 24 年 4 月) P.164 (部分)

ことで、読者の  
 注目を惹こうと  
 したのではない  
 かと思われる。

表紙の女性イラ  
 ストは栗林正幸  
 によるものに代  
 わり、艶かしさ

は一層強調され  
 ている。また、

四・五号までの  
 表紙には、前誌  
 名を示す「新装  
 テラス」の文字  
 も添えられてい  
 る(図版15、16)。

広告に市内の美容室、化粧品、銀行、映画会社、商店が並ぶのは変わらないが、中面広告の量は減少している。記事には、巻頭にカラー口絵小説があり、挿絵付きの小説、一頁未



図版 16 4 巻 4・5 号 表紙



図版 15 4 巻 1 号 表紙

満のコント記事がある。執筆者には、柴田鍊三郎、森一也、美川きよ、林逸馬などが見られ、発行地・名古屋の地方色は、広告主の所在地程度にしか見られなくなる。

試みに、四・五号の内容を以下に掲げてみよう。【】は広告、傍線は小説を表わす。

- P. 2 (見返し) 目次、【池田商店】  
 P. 3～6 カラー口絵 山本和夫絵「湯の町エレジー」  
 P. 7 佐々美代治画「薫風二態」  
 P. 8～9 「絵物語 港の夜」  
 P. 8 【東海銀行】  
 P. 9 【三和銀行】  
 P. 10 みなみよしろう「冷蔵庫」(漫画)、坂本実「皿返し」(漫画)、「千夜一夜」  
 P. 11～16 寒川光太郎、秋保正三画「甘美な和解」  
 P. 16 「江戸小咄」  
 P. 17～23 柴田鍊三郎、山本和夫画「色情の舞台」  
 P. 24～28 「素ッ破抜キコント」後藤信雄「恋文売買」、渡辺綱雄「毒はいづこに」、内田新八「巧みな配役」

P. 26 【ネオワキトル本舗】

P. 28 福原不二雄「実話コント 誤植奇譚」

P. 29～31 美川きよ、魚津良吉画「野獣」

P. 32～39 峯朝太郎、中村英雄画「屍臭」

P. 38～39 「西洋怪奇コント」

P. 39 「西洋掌篇コント」、【マル工眼鏡店】

P. 40～41 「テラス娯楽版」佐藤しづひこ「PONちゃん」、

「珍妙大学講座」、「コント大食い」、「笑話」、「漫画愚評の姫君」、「迷作笑説」

P. 42～44 市橋芳禰「楽屋放談 女よいとこ悪いとこ」「渡

辺はま子 可愛がりよつでポーツとする」「林家正蔵 体格

も頼もしいし良いですな」

P. 45～50 諏訪三郎、栗林正幸画「婚愛なればこそ」

P. 50～54 森一也、中村英雄画「花咲く航路」

P. 55～62 岩下俊作、山本和夫画「焔の街」

P. 62 「ハリウッド 昨今の離婚ばやり」、奥付

P. 63 【長江製菓株式会社】【帝発本店】【月の化粧園】【名

工製版株式会社】

裏表紙 【東宝】【愛知トマト製造株式会社】【松竹】

内容のほぼ全てが大衆小説となり、女性向けの記事は皆無である。男性向けの誌面構成が決定的になったのは、カラー口絵に女性の裸が描かれるようになったことから明らかである(図版17)。

先に、昭和二六年の時点で『読切小説集』の発行部数が四万部であったことを確認した。創刊以来の発行部数の推移は不明であるが、二四年の時点での数値が「ランゲ文庫蔵六・七号の表紙に書かれている。そこには、「発行部数/20,000部」と記されている(図版18、右下)。検閲のための提出時に示された数値であるはずなので、実態的なものと捉えていいだろう。約二年後には、その倍の部数になったということだ。



図版 17 4巻 2-3号 口絵

発行部数とともに気になるのが、流通範囲である。これを示すような資料は確認されていないが、間接的に示してくれる記述が誌面にあった。改題とともに行われた、「テラス三周年記念 貳萬円贈呈大懸賞」の当選者一覧である(図版19)。これは『テラス』に掲載された小説作品の登場人物名をあてるクイズであるが、



図版 18 4巻 6-7号 表紙



図版 19 4巻 2-3号 P.62 (部分)

当選者は氏名とともに住所が記されている。最も多いのが愛知県の一五名、次いで兵庫県・広島県の各三名、岐阜県・福岡県・島根県の各二名、新潟県・三重県・愛媛県・鳥取県・神奈川県・福井県・長崎県・青森県・高知県・静岡県・京都府・宮城県・東京都・大阪府・北海道の各一名である。これがこの雑誌の読者、流通範囲を実態的に示すものではないが、およそどの地域でも手に取られる雑誌であった、即ち、愛知県を軸とした流通でありながらも、発売範囲は全国へ広がっていた、ということはできそうだ。東京編集局が流通経路の開拓までを担ったのかどうかは不明であるが、創刊時とは大きく異なる規模の読者を獲得していたのは確かであろう。

この時期には、より風俗的な作品で構成された『青春クラブ』（図版20）が発行され、翌年一月には改題した『読切傑作読物』



図版20 『青春クラブ』表紙

集』も出ている。単発の出版物として見れば、『シルエツト』と同様に、同時代のカストリ雑誌の一種でしかない。しかし、テラス社の刊行物として見た場合には、『読切小説集』とは異なる、より際物を好む読者を獲得しようとした試みとして見ることができよう。それは、この時期の出版ブーム（低俗な雑誌の隆盛）と関連する動きである。しかしその試みは、『テラス』『読切小説集』のように継続されるものではなく、三号に満たずに終わったようだ。

## 六、『読切小説集』小型化へ

オール小説へ移行した『読切小説集』のその後は、創刊時以上に雑誌自体が確認できないため、不明な部分が多い。第五巻は全号が確認されず、それ以後も残存は部分的で、最終も明らかではない。現在までに判明した範囲までで、その後のテラス社の動きを見てみよう。

昭和二六年代の『読切小説集』第六巻は、二四号と一一号以降が未確認であるが、それまでの合併号のような形はなく、毎月確実に発行していたようである。第六巻は前半と後

半で大きく版型を変えている。

まず前半はそ

れまでと同じB

5版で、総頁数

は一一九から一

二六に拡大し、

毎号二三篇前後

の「読切」作品

を掲載していた。

表紙は山本和夫、

山田余史らによ

る、女性の表情

をメインにした

イラストが使われている（図版21、22）。

それ以前との大きな変化としては、中面広告が皆無になっ

た点が挙げられる。広告は口絵と裏表紙のみで、出稿は東宝、

愛知トマト、東洋醸造のみが確認された。名古屋市内の商店

などの広告はない。内容としては、カラー口絵小説、挿絵付



図版 21 6巻1号 表紙



図版 22 6巻5号 表紙

きの小説、一頁

未満のコント記

事のみである。

執筆者には、北

村小松、由比俊

雄、諏訪三郎、

峯朝太郎などが

名前を連ねてい

る。小説の構成

としては、艶物

と歴史物の二本

立てである。

版型の変更は、

どの号からかが

明らかではないが、第六巻の半ばからB6版になっている。

総頁数は二二六になり、前半期のさらに倍になった。山田余

史の表紙は続いているが、描かれる女性からは艶かしさが消

え、時代物を表す姿の女性になっている（図23、24）。

後半期からは、小説内容の主軸が仁侠物へ移されている。



図版 23 6巻7号 表紙



図版 24 6巻8号 表紙



この時期には「読切」をタイトルに含めた類似誌が多数発行されており、他誌との区別はつきにくい。言い換えれば、多職種の中に紛れ込まれる結果として読者に購買され、「読切小説集」は生きながらえたのかも知れない。この時期の発行部数が、先に見た「四万部」である。「テラス」からの固定した読者がいた一方で、読み捨てる読者も相当数いた結果として、この雑誌は部数を伸ばしつつ刊行が続けられたのだろう。中面広告の廃止は、雑誌の売り上げだけでテラス社の経営が成り立っていたことを物語る。第五巻、六巻以降の実物が極端に少ないのは、読み捨てられた実情を反映しているとも考えられよう。「総合娯楽雑誌」と題した第一巻、二巻とは性格を大きく変えたが、カストリ雑誌のブームに合わせるように誌面構成を変え、売れる雑誌を作ることに成功したと言えそうだ。ただし、カストリ雑誌の隆盛はこの頃には下火になり、やがて週刊誌の時代が訪れようとしていた。

その後の『読切小説集』は、七巻三号（図版25）のみ確認されたが、それ以外は全く不明である。版型はB6、総頁数は二一八。内容としては、変わらず時代物、仁侠物の小説が並んでいる。広告は裏表紙の愛知トマト、中部瓶詰株式会社

のみである。編集は東京、印刷は愛知、というパターンも変わってはいない。こゝまでが、現在までに追えたテラス社の出版活動である。

#### まとめ

こゝまで、愛知県で発行された一地方雑誌の変遷を追ってきた。これをもって、占領期地方メディアの概観とすることはできない。しかし、これほどまで内容を変化させながら出版を続けたタイトルも珍しい、ということはある。

先に、石川による「狭義」のカストリ雑誌の流れを確認した。この流れと「テラス」「読切小説集」の変遷を並べたとき、時期はずれながらもその変化が一致していることが分か



図版 25 7巻3号 表紙

る。「テラス」は「狭義」のカストリ雑誌として創刊されたわけではない。同時期に創刊された『リべらる』に近いもので、大衆向けの総合雑誌、という位置づけである。しかし、徐々に性風俗を主軸にした内容となることで、「広義」のカストリ雑誌へと模様替えし、裸体写真は使われていないものの、イラストで女性の裸を描くなど、「狭義」のカストリ雑誌第二期のあり方に沿うような編集方針の変更を打ち出している。また、時期は『夫婦生活』よりも遅いものの、B6の小型版へ版型を変えて刊行を続けた。テラス社は東京に編集局を置いていたので、東京を中心とした出版の流行に対して、意識的な編集がとられていた可能性がある。

いずれにしても、戦略的な編集で生きながらえつつも、おそらくは昭和二七、二八年頃に『読切小説集』は終刊を迎えたのではないかと思われる。カストリ雑誌の衰退は「本格的娯楽雑誌」の台頭によるものだが、読物に偏重して「本格的」な要素が薄かった『読切小説集』も、同様に淘汰されていったのだらう。創刊時に「総合娯楽雑誌」を冠した『テラス』が始まりだったことを考えると、『娯楽雑誌』に『読切小説』雑誌が対抗できなくなったこの流れは、皮肉のようにも感じ

られる。

しかしながら、特典会員の募集や興行代理業、東京編集局の開設に誌名の変更、商標登録など、テラス社の巧みな経営は見逃せないものがある。地方出版社でありながらも、東京での出版の動きを注視しながら、大胆に誌面を変化させていた。その変化の大きさは、創刊時に映画・演劇雑誌として出されたことなどは忘れ去られていることからも見て取られる。テラス社の出版活動が、愛知県における他の出版業者とどのような関係性にあったのか、あるいは、カストリ雑誌が勢力をもった読書空間の中で『読切小説集』はどのように読まれ、消費されていったのか。同時代メディアの中でどの位置づけは、部分的にしか確認されない資料面での制約もあり、なかなか困難な課題である。しかしながら、地元新聞社のバックボーンを持たずに、敗戦直後の困難な出版状況を乗り切り、カストリ雑誌のような形をとりつつ発行を続けた特異な出版社が地方に存在したことも、占領期メディア空間の一面である。ここに、中央と地方とのメディア環境の影響関係を見ることもできよう。

注

- (1) 主なものに、『占領期雑誌資料大系』大衆文化篇一五(岩波書店、平成二〇年九月、二二年七月)、文学篇一五(同、平成二二年一月、二二年八月)、『占領期生活世相誌資料』一三(新曜社、平成二六年八月、二八年二月)などがある。また、NPO法人インテリジェンス研究所による「二〇世紀メディア情報データベース」の意義も大きい。
- (2) 平澤秀和「戦後占領期の出版社と出版活動」『北海道の出版文化史 幕末から昭和まで』北海道出版企画センター、平成二〇年一月、一六七—一七九頁。
- (3) 『月刊東奥 戦後版』東奥日報社、復刻・三人社、平成二九年一月。
- (4) 『月刊さきがけ』秋田魁新聞社、復刻・三人社、平成二九年七月。
- (5) 『月刊にひがた』新潟日報社、復刻・三人社、平成二八年一〇月。
- (6) 『占領期の地方雑誌 プランゲ文庫で迎える検閲の足跡』実業之富山社、平成一九年二月。
- (7) 『占領期の出版メディアと検閲 戦後広島島の文芸活動』勉誠出版、平成二五年一〇月。
- (8) 『浜田新聞』石見タイムズ』復刻・三人社、平成二六年一月。
- (9) 『四国春秋』四国新聞社、復刻・三人社、平成二七年一月。
- (10) 注2に同じ、一六八頁。
- (11) 『日本雑誌協会史 第二部』日本雑誌協会、昭和四四年九月、一四六頁。
- (12) 『第四十五回 名古屋統計書』名古屋市役所、昭和三三年三月。
- (13) 石川巧「占領期カストリ雑誌研究の現在」『インテリジェンス』第一七号、平成二九年三月、三三三頁。
- (14) 『戦後雑誌発掘 焦土時代の精神』日本エディタースクールの出版部、昭和四七年八月。『雑誌で見る戦後史』大月書店、昭和六二年四月。
- (15) 『雑誌で読む戦後史』新潮社、昭和六〇年八月。
- (16) 『戦後出版の系譜』日本エディタースクールの出版部、昭和五一年二月。
- (17) 『山口県史編纂とプランゲ文庫』山口県史 史料編 現代3の編集を通じて』インテリジェンス 第三号、平成一五年一〇月、四八—五六頁。
- (18) 『プランゲ文庫に見る大分県の活字文化と検閲 地方誌は「閉ざされた言語空間」に囚われていたか』インテリジェンス 第一〇号、平成二〇年八月、八七—九四頁。
- (19) 『占領下の地方における性と生殖の啓蒙的言説 性教育専門誌「めざめ」について』インテリジェンス 第一一号、平成二三年三月、一一九—一四四頁。
- (20) 『占領下の児童出版物とGHQの検閲』(共同文化社、平成一八年六月)特に第三章「児童雑誌にみる検閲」二五九—三

- 八五頁。
- (21) 『雑誌』『労農』研究 占領期山形における地方文化運動の再検討のために、『日本研究』第五六号、平成一九年一〇月一四九—一七一頁。
- (22) 注18に同じ、九〇頁。
- (23) 注14に同じ、一一八頁。
- (24) 『愛知県で発行された戦後雑誌(一)』、『同(二)』、『郷土文化』昭和六一年二月、六二年八月。
- (25) <http://websv.aichi-pref-librari.jp/colle/prange.pdf>。抽出には『メリーランド大学図書館所蔵コードン・W・フロンゲ文庫雑誌目録 第三巻 都道府県別索引・分野別索引(平成一三年)』を用いたと思われる。
- (26) 三重県立図書館が「戦後すべてに県内で発行された雑誌(フロンゲ雑誌コレクション)三重県の部」をまとめている。  
[http://www.library.pref.mie.lg.jp/?page\\_id=145](http://www.library.pref.mie.lg.jp/?page_id=145)
- (27) 『雑誌特集：静岡県むすび版れた雑誌』  
<https://prangecollection.jp.wordpress.com/2015/11/22/%E9%9B%91%E8%AA%8C%E7%89%B9%E9%9B%86%E7%BC%9A%E9%9D%99%E5%B2%A1%E7%9C%8C%E3%81%A7%E5%87%BA%E7%89%88%E3%81%95%E3%82%8C%E3%81%9F%E9%9B%91%E8%AA%8C/>
- (28) 県立長野図書館「フロンゲ文庫雑誌コレクション(マイクローンヤシム)」<http://www.library.pref.nagano.jp/collec-tion/magazine/prange>
- (29) 「動態としての占領期雑誌研究に向けて 福島鑄郎コレクシオン予備調査を通して見えてきたもの」『インテリジェンス』第一七号、平成二九年三月、三五—四八頁。
- (30) 注19に同じ、三六頁。
- (31) 注19に同じ、四五頁。
- (32) 注19に同じ、三七頁。
- (33) 注19に同じ、四五頁。
- (34) 注19に同じ、四四頁。
- (35) 注19に同じ、三六頁。
- (36) 前島や注13の石川が共通して活用している。「一九五一年版 出版社・執筆者一覧」の「付録1 雑誌名及同発行所総覧」にある「大衆」部門に、カストリのな内容を持つ雑誌が含まれる。前島によれば、「ここでの「大衆」部門とは、「読物誌」と娯楽情報誌を核としつつ、時局誌や婦人雑誌などにも共通する要素を合わせ持った、非常に幅の広い概念であった」(注19、四〇頁)とされる。
- (37) 『カストリ考』(昭和三九年七月)、『続カストリ雑誌考』(昭和四〇年七月)。いずれも私家版。
- (38) 『カストリ文化』考、三一書房、昭和四四年五月。
- (39) 『カストリ雑誌にみる戦後史』、オリオン出版、昭和四五年二月。
- (40) 『カストリ雑誌研究』、出版ニュース社、昭和五一年七月。中公文庫、平成一〇年八月。
- (41) 抽出には、斉藤夜居らの成果の他に、「戦後の発禁本」

- (42) 『猫眼石』創刊号・昭和三八年二月、第二号・同三月)などを参照した。
- (43) 矢留節夫が満洲から引き上げた後、下関、名古屋、東京と場所を転移しながら刊行をしていた(若狭邦男『探偵作家尋訪』日本古書通信社、平成二二年二月、三六頁)。また、長谷川は博多が出版地であったことから、「カストリ雑誌地方版」と位置づけている(注28、一八三―一八四頁)。
- (44) 石神書店がのちに東京へ進出、双立社は『猟奇ゼミナール』の発行元が東京都目黒区の世相研究社になっている。後者の関係性や実態はよく分からないが、東京への販売ルートを持っていたと想像される。
- (45) 「出版 際物に名を成す」『岐阜年鑑(昭和二四年版)』岐阜タイムス社、昭和二三年一月、二六四頁。
- (46) 注13に同じ、二八頁。
- (47) 『岳人』は、もともと昭和二二年五月に京都大学山岳部の有志が創刊したもので、二四年七月から中日新聞社が発行元となっていたが、平成二六年九月号からネイチュアエンタープライズ(アウトドア用品メーカー・メンバーのグループ会社)へ業務が引き継がれた。
- (48) 日本出版協会、昭和二二年九月
- (49) 日本出版協会、昭和二二年二月
- (50) 日本出版共同株式会社、昭和二三年一月
- (51) 日本出版協会事業部、昭和二六年四月、二二五頁。ただし、
- (52) 「雑誌名」は「テラス」と記載されている(この時期には既に『読切小説集』へ改題されている)。
- (53) 総理府新聞出版用紙割当局、昭和二六年六月、一六六頁。注52に同じ、三五頁。
- (54) 木本円寿『名古屋戦後文学試史』北斗工房、昭和三七年五月、五頁。
- (55) 平凡社、平成二一年七月。一八五頁に『テラス』第三巻二号の表紙が掲げられている。ちなみに、『明治大学図書館所蔵 城市郎文庫目録』(平成二九年三月、明治大学図書館)には、「一般雑誌の部」に三巻二号のみ記載があるため、城市郎コレクションの『テラス』はこの一冊のみ、ということになる。おそらく表紙の女性画でカストリ雑誌と分類したものと想像される。ただし、「りべらる」をカストリ雑誌として大きく掲載していることから、この分類は出版史の観点から見ると正しいものではない。
- (56) 北海道立文学館には、一巻五号と二巻一・二号の二冊が所蔵されている。ちなみに、テラス社の出版物は、『福島講師所蔵占領期雑誌目録』(文生書院、平成一七年九月)にも記載はない。
- (57) 「J・E・M・ハウス」通販サイト(<http://bmhouse.shop-pro.jp/?pid=98214176>)で表紙画像が確認される。(平成三〇年一月一〇日確認)
- (58) 石川巧立教大学教授からの教示による。
- (59) 「別冊付録のご自愛唱歌集」があったようだが未見。

(60) 国立国会図書館に該当号の所蔵はあるが、破損が烈しく、「編集後記」などは読み取られなかった。

(61) この鼎談には、名古屋市内の新聞社に所属する女性記者六名が参加している。「取材の苦心談」について森下は、「婦人記者は男の記者が、開拓していない面に食い込む余地があると思つわ、たとえば配給の行列や、井戸端会議の中から世相がつかめるんぢやないかしら」と発言をしている。この意識が、美容師たちの記事掲載へ繋がっているのかも知れない。また、仕事については「私はいまのお仕事がとてもたのしいわ、家の中に引きこもっているよりも、よほど生き甲斐を感じているわ」と語っている。テラス社の関係者による証言は、現在のところこの記事しか見つかっていない。

(62) ただし、六・七号までは「恋愛傑作」「傑作」「特選」の角書きがあり、『読切小説集』が正式なタイトルになったのは八・九号からである。

(63) 同時代の「読切」が誌名に付けられた雑誌には、次のようなものがある。『時代読切傑作集』（銀座文庫、昭和三年一月～）、『別冊読切傑作集』（双葉社、昭和二年～）、『読切小説時代』（あやめ書房、昭和三年）、『読切倶楽部』（三世社、昭和二年～）、『傑作読切小説』（立山書房、昭和二年～）、『読切雑誌』（教材社、雨読書院、昭和二年）、『読切雑誌』（双葉社、昭和三年）、『につぼん読切小説読物』

（日本社）

(64) 『ニッポンシネマリーグ』（昭和二年一月）には、森川

邦三郎「中京の映画雑誌変遷史 名古屋フアンの研究的な歩み」（六 七頁）という記事があるが、この中に『テラス』に関する言及は全くない。

本稿は、科学研究費補助金・基盤研究B「占領期ローカルメディアに関する資料調査および総合的考察」（代表：千葉大学・大原祐治、16103386）の研究成果の一部である。

（長野県短期大学助教）